SDGs 達成に向けた「日本の祭りと生物多様性保全プロジェクト」教材

八百津だんじり祭り
藤のツルから考える人と自然の共生

第１章　祭りとだんじり

八百津だんじり祭りとは

八百津だんじり祭りは、４月の第２土曜日と翌日に岐阜県加茂郡八百津町でおこなわれる大船神社のお祭りです。八百津は、木曽川舟運の始発点であり、人と物の交流の拠点で祭りも盛んになりました。

だんじり祭りは、曳き手によって勢いよく曳かれ、かつてはだんじり同士を故意にぶつけようとするなどあり、別名「けんか祭り」とも言われていました。祭りの際に曳かれるだんじり（山車）は、本郷・黒瀬・芦渡の３組に分かれており、３つの組の３輌を合せると船頭は芦渡、船尾は黒瀬、胴中は本郷と大きな船の形になります（右写真）。祭礼がおこなわれる大船神社は、大船権現山（権現〔ごんげ〕とは神が仮の姿で現れたもの）に由来します。

写真：３輌が並んだだんじり
写真出典：岐阜県＿https://www.kankou-gifu.jp/event/detail_5003.html

平安初期は、山そのものがご神体であり、その後、山の麓に大船神社が創建され、祭神も神社に安置されました。神社に安置されていたのは本郷組の産土神〔うぶすながみ〕（土地の守護神）である白山大権現でしたが、応永年中 (1394 ～ 1428) に大船権現山から大船権現を移し、白山権現と併せて祀り、大船権現は村の総氏神となりました。

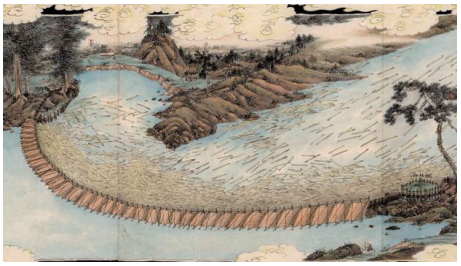
出典：祭礼事典・岐阜県＿岐阜県祭礼研究会

八百津の歴史と藤のツル

現在はダム湖に沈んでしまいましたが、木曽川にかかる八百津橋のたもとには、かつての「川のみなと」である黒瀬湊がありました。黒瀬湊の上流には、錦織綱場がありました。綱場〔つなば〕とは、木材運搬河川の中流の要所に頑丈な留綱を張り渡して、流送される木材をせきとめた場所のこと。上流から辿り着いた木材は綱場で筏〔いかだ〕に組まれ、下流のまちに流送されました。

筏を組むための縄として用いられたのが藤〔フジ〕のツルです。フジのツルは、繊維が強いため、筏組みだけでなく、だんじりの柱を縛る縄としても使われています。

だんじりには、フジの匍匐枝〔ほふくし〕と呼ばれる、地上を這うツル状の幹がもちいられます。ツルは、匍匐枝のようにまっすぐ地面を這うものと、他の植物に巻き付くものがありますが、樹木に巻き付いたフジの蔓は巻き癖がついているため、力が加わると裂けやすいといわれています。八百津では、匍匐枝を「根フジ」、巻き蔓を「立ちフジ」と呼んでいます。



写真：留綱張渡之図(左)、鴨桴之図(右)
写真出典：中部森林管理局＿https://www.rinya.maff.go.jp/chubu/kiso/morigatari/unzaihou.html

出典：藤と日本人＿有岡利幸

第 2 章 | 藤と森林

藤とは

八百津でながく利用されているフジは、マメ科フジ属の植物であり、日本・東アジア・北アメリカに 8 種ほど存在します。日本には、フジ (別名ノダフジ) とヤマフジの 2 種類が自生しています。他の樹木に巻き付く、つる性樹木のフジは、上から見て時計回りに巻き付き登っていくのがノダフジ、反時計回りがヤマフジです。

花やツルが注目されるフジですが、マメ科の植物なので、20 ㎝ほどの枝豆のような実がなります。この実は、乾燥してねじれることにより、中の種子を遠くへ弾き飛び出します。このような種子繁殖の方法と匍匐枝（ツル）を四方へ延ばしていくクローン繁殖の2つの方法で分布を拡げます。

写真：フジの実
写真出典：松江の花図鑑＿https://matsue-hana.com/hana/nodahuji.html

多くの樹木は、風雨に耐えて自重を支えるために、丈夫で太い幹や枝を持ちます。他方、フジのようなツル植物は、巻き付いて他の植物に寄生することで、太い幹や枝を作り出すエネルギーを節約し、匍匐枝（ツル）を素早く長く伸ばすネルギーに使うことができているのです。

出典：藤と日本人(八坂書房)＿有岡利幸
　　：つる植物の多様な生態と多様な研究(日本生態学会誌69)＿種子田春彦・鈴木牧・井

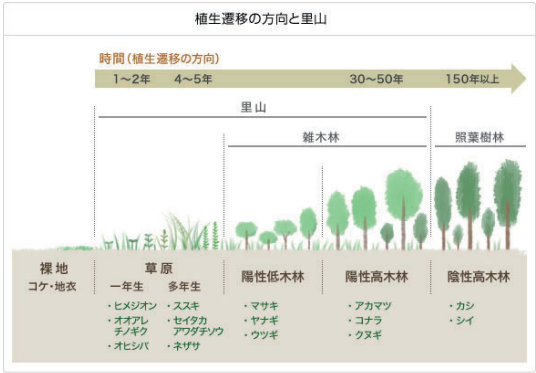
藤の功罪

フジに限らず、樹木に絡みつくツルは林業関係者にとってやっかいものです。幹にくい込んだツルは、材木としての形状を悪くし、ひどい場合には折損することもあります。一度くい込む程まで成長してしまったツルは取り除いた後も、材木には圧迫された跡が残り、材は材質・強度・加工の面で、問題があるといわれています。林業においてツルの巻き付きを放置した場合、樹木を圧迫することで枯死し、倒木の可能性もあります。

しかし、他方で、森林には撹乱 (かくらん) という作用が必要な場合があります。撹乱とは、規模の大きいものは洪水や土砂崩れ、小さいものは倒木などにより、一部の植生をリセットすることであり、更新を制御する重要な現象です。植生は、長い時間をかけて変化し、草地から森へと育っていくのです。

フジのツルが巻き付いたことによって発生する倒木は、森林に小さな空間 (ギャップ) を生み出すひとつの要因でもあります。暗い森に日光が差すことで、新たな植物の更新がおこなわれます。そして、新たな植物の更新がおこなわれることにより、関連する他の生物の多様性も維持発展すると考えられます。

写真：ツルの巻き付き
写真出典：森づくりの技術＿横井秀一



© 私の森.jp

写真：植生の変化
写真出典：私の森.jp＿https://watashinomori.jp/study/basic_02-2.html

出典：森林生態学(全国林業改良普及協会)＿藤森隆朗
　　：ヒノキ造林地におけるつる植物と被害(林業試験場研究報告)＿鈴木和次郎

第３章　藤利用に見る人と自然の共生

藤の文化と森の循環

八百津が木曽川上流で伐採された木材の中継地点として栄えた歴史の中で、フジのツルは筏組みの重要な役割を担い、まちに富をもたらしました。現在では、祭りのだんじりにのみ、その痕跡を見ることができますが、フジの利用は決して伝統維持の文化的意味だけではなく、実利的な意味もあります。

だんじりのフジは、1月末から2月初旬に刈り取られます。その後、干され乾燥させたフジ蔓は、黒瀬湊において3週間ほど水に浸してから引き上げ1週間後のだんじりの組立に使用します。こうした一連の作業は、関係者にとって大きな負担となっていますが、ある年、ナイロンのロープを代用したら、だんじりの柱にヒビが入ってしまったとのこと。天然のフジの力が再評価されました。

だんじり祭り以外でも、フジのツルは利用されています。長野県諏訪市の諏訪大社御柱祭の際に御柱を曳いていく綱にはフジのツルが用いられます。また、繊維は丈夫な布として利用されていた歴史もあり、藤織は京都府の指定無形民俗文化財に指定されています。

八百津では、林業にとって大敵であるフジのツルを駆除し、尚且つ利用してきたと考えられます。また、他の地域でも伝統的に里山でツルを取り、祭りや工芸などに利用してきました。昨今では、そうした利用も減り、フジのツルは森で増え続けているかもしれません。

しかし、人の利用が減っても、フジは、つる性植物という特性により、森林循環の一役を担い続けています。人と自然の関係は、人の手による自然の破壊、人の利用しやすい自然環境の手入れ（里山など）、そして、手つかずの自然保護など、さまざまな関係があります。今回ワークショップでは、人に対してときに有益で、ときに有害な自然素材であるフジのツルについて考えました。これをきっかけに、さらに深く、人と自然との共生について考えていきましょう。

考えてみよう！

Q１．フジのどのような機能に興味を持ちましたか？

A. _____

_____

Q２．フジから「人と自然の共生」に関するどのような知恵や課題がみられましたか？

A. _____

_____

Q３．ワークショップでは、八百津だんじり祭りを通して人と自然の関わりを学びました。 SDGs（持続可能な開発目標）の17ゴールとのつながりをいくつ見つけることができましたか？

キーワード：
だんじり、フジ、黒瀬湊、林業、木材、つる性植物、フジ蔓、川を使用した流送、自然素材、繊維、藤織、伝統工芸、倒木、攪乱、循環、更新、里山、共生、

第4章 ワークショップ開催報告 (2023年1月28日(土)10時30分～17時30分)

八百津の歴史と環境

2023年1月28日、岐阜県加茂郡八百津町において、『八百津だんじり祭り～藤のツルから考える人と自然の共生～』と題し、「八百津だんじり祭り」で、山車の素材として使われるフジの森での役割りと、人との関わりについて考えるワークショップを開催しました。

ワークショップの午前中は、だんじりで使用するフジのツルを地元の方とともに採取する予定でした。しかし、前日の積雪で中止となり、フジの採取箇所の見学及び八百津の名所巡りと変更しました。

フジの採取箇所は、本郷、黒瀬、芦渡の3つの組で別々です。今回、見学をおこなったフジの刈り取り場は、本郷組です。黒瀬組では、根フジ(匍匐枝)を使用しますが、本郷組は樹木から垂れ下がったフジのツルを使用することを教えて頂きました。

その後、黒瀬組の市岡和男氏の案内のもと、大舩神社、錦織綱場、黒瀬湊と見学を行い、1933年創業の三勝屋にて昼食としました。

大舩神社

刈り取ったフジの見学

藤と人と里山について学ぶ

会場である八百津本町公民館において、「受け継がれる藤のツルと八百津だんじり祭り」と題した市岡氏による講演、「藤の森での役割り」と題した中部大学の竹島喜芳氏による講演がありました。

市岡氏からは、躍動感あるだんじり祭りの様子や、祭り当日までの準備における苦労についてを聴くことができました。また、だんじりの組み立てにおける、フジのツルの利用法と筏の結束の共通点の解説により、八百津とフジの結びつきを感じることができました。

竹島氏からは、フジという植物についての解説からフジの加工とそれを利用する里山と森林制度について聴くことができました。フジ利用と竹細工の類似点から竹島氏による竹細工の実演がありました。

講演後には、黒瀬組のだんじり倉庫内において、解体されただんじりの見学をおこないました。解体されただんじりは、倉庫に格納され、普段は観ることができない状態であり、貴重な体験でした。また、黒瀬組・芦渡組の方々と参加者との交流をおこない、組み立ての見学や祭りの参加をしたいという気持ちが高まりました。

講演の様子

だんじりの見学

本ワークショップでは、地元の方々のご協力があり、八百津の環境と文化に関する様々な知見を得ることができました。